

『おばあちゃんのこと』

中村一子

9182文字

あらすじ

僕はおばあちゃんとお姉ちゃんと3人で暮らしている。月に2度ほどしか帰ってこない単身赴任の両親が、僕の中学の卒業式に出席するために帰ってきた。そこでおばあちゃんが「掃除のお婆ちゃん」として、教育委員会から表彰されるハプニングが待っていた。

地平線の彼方に、夕日が沈んでいく。

3 月半ばの千葉。人影まばらな幕張の浜。穏やかな波。風がひんやりと抜けていく。

鼻先をかすめる潮の匂いは、濃厚な漁港のものとは全然違う。人工のこの浜はかすかな潮の匂いしかない。

僕は 15 歳。

この街で生まれ、この街で育ち、あと 2 週間もしたら、函館の高校に進学する。

浜はそのまま、おばあちゃんの思い出につながる。

僕にはパパもママもお姉ちゃんもいる。みんなで貝殻を拾ったり、波と追いかけてっこをしたりしたこともある。でも、転勤族のパパと、キャリア志向のママは、僕が物心ついた時から、単身赴任を繰り返している。お姉ちゃんはバレエとかピアノとか、塾通いで忙しく、僕と遊んでくれるのはもっぱらおばあちゃんだった。

僕がすごく小さかったころ、おばあちゃんは夕日を見ると、「お日様は眠るために海の向こうに帰って行くんだよ。そして、朝、一番にみんなに会いにくるんだよ」と言った。雨の日は何をしているのかと尋ねると、「大好きなお月様のところに遊びに行くんだよ」と、メルヘンの世界に僕を案内してくれた。

それから僕が少し大きくなると、夕暮れ時は、「逢魔が時」だと言って、魔物が出会うときだから、気を付けないといけない。人さらいも魔物だから、あやつらもこの「逢魔が時」を狙って現れる。だから、けっして 1 人で、この時間に外にはいけない、と脅してきた。

しかし今、僕はおばあちゃんのそんな脅しが束になってかかっても、動じないほど大きくなった。

ポケットのスマホが鳴った。おばあちゃんだ。

「颯太？」

「うん」

「もう 6 時だよ」

「うん」

「ご飯できてるから」

「うん」

「早く帰っておいで」

「うん」

短い会話の後、電話が切れる。

僕にとってはまだ6時なのだが、おばあちゃんにとっては「もう6時」。おばあちゃんと僕の時間がいつのころからか、少しずつズレ始め、それは日に日に大きくなっていくような気がする。

おばあちゃんと2人、向き合って夕飯を食べる。

パパは大阪、ママは名古屋に単身赴任中だ。僕と3つ違いのお姉ちゃんはW受験で、2人とも塾で忙しく、おばあちゃんは週のほとんどを1人で食事をしてきた。その反動というわけでもないだろうが、おばあちゃんをよくしゃべる。僕は半分くらいは聞いているが、半分くらいは聞くふりをしている。料理が美味しいのが救いだ。

お姉ちゃんは大学が決まったら、今度は彼氏とデートで忙しく、帰りが遅い。「あんたはズルイのよ。函館なんかで1人で逃げちゃって。アタシはね、これからおばあちゃんと2人で暮らすのよ。分かる？ あー、もう、考えただけでウザい！」と口を尖らせる。

僕もそれが心配の種だ。わがママが服を着ているような、反抗期のお姉ちゃんと、世話焼きのおばあちゃんがうまくいくとは思えない。お姉ちゃんとおばあちゃんが円滑な関係でいられるために、お姉ちゃんが彼氏とうまくいくことを祈るしかない。彼氏と上手くいってるときは、お姉ちゃん、めっちゃ、機嫌いいから。

そんな僕の心配をよそに、おばあちゃんは喋り続ける。

「一、思いついたときに話しておかないと、死んでから『あっ、あれを喋り忘れた』なんて思っても遅いからね」

「……」

こういうとき、孫としては、目を細めて笑ってあげるしかない。

その夜、9時過ぎに、まずパパが、そして、ママが帰ってきた。明日の僕の中学の卒業式と、明後日のお姉ちゃんの高校の卒業式に出席するためだ。お姉ちゃんはパパが帰ってくるちょっと前に帰ってきて、ずーと前に帰ってたのよ～、みたいな顔をして、リビングのソファに座って、スマホをいじっている。僕も同じように、好きな優菜ちゃんとラインをする。優菜ちゃんとは恋人つなぎどころか、手

を握ることもなく、こうしてラインの世界だけで付き合っている。どうやったらもう 1 歩進展するのか。それを考えると頭が痛い。

本当は僕もお姉ちゃんも自分の部屋でやりたいのだけど、「パパが帰ってくるときは、リビングでパパを迎える」というのが、おばあちゃんの唯一のお願いなのではない。おばあちゃんはママのほうのおばあちゃんだから、おばあちゃんなりにお嬢さんのパパに気を遣っているのだ。

ママが帰ってきて、家族が 5 人揃うと、たいていママが喋っている。ママは一人っ子で、うんと甘やかされて育って、家事とか非生産的なことはやらない。それはパパと結婚しても変わらない。逆にパパは学生のと時から一人暮らしが長かったので、一応の家事はできる。出来ないのは子どもを産むことぐらいだ。これは僕とパパが『スパイダーマン』を見に行ったとき、帰りに入ったファミレスでのパパから聞いた話だ。

リビングに家族 5 人が揃うのは、お正月以来だ。ママが「紗矢と颯太が卒業してくれるのは嬉しいけど、ママなんて 2 人の学費のために働いているようなもんだわ」

と悲劇のヒロインみたいに、首を振った。

「ママ、アタシは自宅通学。お金がかかるのは颯太でしょ。学費に寮費。それに函館、東京間の交通費。剣道部の先輩がいるからって理由だけで、なんで函館の高校に行く必要があるの？ ぜーんぜんわかんない」

お姉ちゃんがまくしたてる。

「だから、先輩がいいところだって……」

「そういうところ変。じゃ、あんたはなんでも先輩のいいなりなの？」

「あ～」とママが思い出したように

「紗矢にはその分、何かおねだりされそうだわ」

と溜め息をついた。

「ママ、何、それ？」

お姉ちゃんが無然として言う。

「僕を盾に、お姉ちゃんが自分を正当化して、要求をエスカレートさせるってこと」

僕はただ冷静に分析しただけなのに、お姉ちゃんはキツとした顔で、テーブルの上の夕刊を取ると、僕の頭を叩いた。大人 3 人はそれを見て見ぬ振りだ。女子

は怒らせると厄介だとみんな知っているから、スルーして、黙ってママのお土産のひとくち一口ういろを口に入れる。

僕は発言したことを後悔した。パパみたいに「当たらず、触らず、逆らわず」の精神をすっかり忘れていた。そうなんだ。「これだけは絶対に譲れない」というときのために、「溜め」が必要だったのだ。不覚。

「あら、雨？」

ママがつぶやいた。ホントだ。天気予報、雨なんて言ってなかったような気がしたが、確かに窓を叩く雨音がする。パパがカーテンを開けて、「降り出した途端に、土砂降りだ」と言った。遠くで雷が鳴った。

「いやだ。明日、雨？ 新しい靴を履いていこうと思ったのに」

ママのトーンが、グッと落ちた。

「雨の確立 80 パーセント。残念。ほら」

お姉ちゃんがスマホ画面をママに見せた。悪魔のようなオンナだ。

「大丈夫。あたしゃ晴れ女だから、朝になったら、止むさ」

おばあちゃんが悠長に構えて、誰よりも早く、2 つめのういろくに手を伸ばした。

「お母さんたら何言ってんの。明日は颯太の卒業式。お母さんの卒業式じゃないのよ。それに何。その頭」

「パープルのウィッグなんて、イケてるじゃん」

お姉ちゃんが、美容院で紫に染めてきたおばあちゃんの髪を、カツラだと思い込んでからかった。おばあちゃんをよくわからないまま、「そうかい」と言って、お茶をすすった。

翌朝、おばあちゃんの言葉通り、雨が上がって、雲の間から薄日がのぞいた。パパが

「お義母さん、さすがですね。気象予報士、顔負けですよ」

と言って、おばあちゃんを喜ばせた。お嬢さんのパパが、やっぱり一番エライ。

体育館で举行された僕たち 132 名の卒業式は、プログラム通り終了した。女子の号泣。パイプ椅子に腰を下ろした女の先生たちが、ハンカチで涙を拭いている。

後ろの父兄席から漏れてくるすすり泣き、もらい泣き、その他よくわからない、何か感極まって泣く人たちの声。お決まりの光景。去年、僕はそれを在校生とし

て見ていて、なぜ保護者が泣くのか意味不明だったが、いざ自分が旅立つほうに回ったら、少し分かる気がした。もちろん、卒業式という「儀式」の雰囲気にもまれていたこともあるだろうが。

「これを持ちまして、本年度の卒業式を終了いたします」
教頭先生がマイクを通して、閉会を告げた。それなのに
「えー、これからプログラムにはございませんが、特別表彰の時間を設けました。卒業生、在校生一同はそのまま着席。ご父兄の皆様にもぜひこのまま、ご参加のほどをお願い申し上げます」
と、予定外の延長戦を宣言した。

「では、幕張第一中学校、及び幕張第二小学校における清掃美化ボランティア活動に12年もの長きにわたり、貢献していただきました神山良子さんに対して、千葉教育委員会から感謝状と副賞の授与式を只今から挙行させていただきます」

教頭先生の口からおばあちゃんの名前が出て、僕は心臓が飛び出るくらいビックリした。

「では、神山良子様、檀上へどうぞ」教頭先生が来賓席に向かって言った。さっきまで見えなかったのに、いつ来たのか、おばあちゃんがいた。それも一度も見たことのない着物を着て、口紅までつけている。そうか、紫の頭はこのためだったのか。

おばあちゃんはゆっくりと、檀上に続く階段を上った。

あちこちから僕に視線が集まり、「颯太んちのお婆ちゃんじゃん」と囁く声があった。

「生徒は静かに！」

教頭先生が一喝した。

おばあちゃんがステージの中央に立った。僕は上体を伸ばして、食い入るように、檀上のおばあちゃんを見つめた。無意識に握りこぶしを作り、力が入った。桜の花の綺麗な着物をきたおばあちゃんは、家で見るとおばあちゃんより10歳くらい若く、20倍くらいキレイだ。教育委員長の代理で来た人が感謝状を読み上げた。

「感謝状 神山良子殿 貴殿は千葉市立幕張第1中学校、及び幕張第2小学校における清掃美化ボランティア活動に、12年もの長きにわたり、貢献してこ

られました。その活動は、本教育会、及び小・中学校関係者、全生徒の手本であり、励みになりました。ここに長年の謝意を伝えるとともに、今後の益々のご健勝を祈念して、感謝状と記念品を進呈いたします。―」

おばあちゃんが感謝状と記念品をもらおうと、大きな拍手が起きた。僕は誰にも負けないくらい大きく、強く拍手した。自分が表彰されているわけでもないのに、なぜだか、すごく興奮して、舞い上がっていた。

僕たちの中学の校長先生と、小学校の校長先生から、花束の贈呈があった。中学のほうが、小学校のより少し豪華に見えた。おばあちゃんは花に囲まれ、顔をくしゃくしゃにして、何度もお辞儀をしていた。父兄席のほうから、人一倍大きな拍手が聞こえた。

教頭先生がおばあちゃんに
「神山様、せっかくですので、卒業生に何かはなむけのお言葉をいただけませんかでしょうか」

と依頼した。おばあちゃんは胸の前で、小さく手を振って辞退した。

父兄席の方から「お願いしまーす」と声が飛んできて、その声で体育館の緊張感が一気に緩み、同時に催促の拍手が起きた。おばあちゃんは困ったように、首をかしげたけれど、花束と賞状と記念品を演台に乗せると、台上のマイクを自分の方に引き寄せ、口の高さに合わせた。

そして、着物の袖から砂時計を出すと、「では、この砂が落ちるまで 3 分」といわずらっぽく笑みを浮かべた。砂時計がみんなの笑いを誘った。僕の心臓の音がどんどん早くなっていることも知らず、おばあちゃんが話し始めた。

「さきほど『清掃美化活動』とありましたが、そんなしゃれたものではありません。ただ、トイレの掃除をやっただけです。ですから、学校に行くとみんなからは『トイレのお婆ちゃん』と呼ばれておりました。それこそ『くそババア』でございますよ」

おばあちゃんがそう言うと、大爆笑が起こった。言ったおばあちゃんも自分でケラケラ笑っていた。

「ことの初めは 12 年前、孫娘が小学校に入学したときのことです。学校から帰るなり、『学校のトイレ、臭くて気持ち悪い』と。その一言が引き金になりました。だったら、綺麗にしてあげようと、ただそれだけの理由でトイレの掃除をさせてい

ただくようになりました。……」

体育館の2階の窓から、眩しいくらいの日が差し込んだ。

「孫娘の下に3歳違いの男の子がいたので、最初から長いスタンスでやろうと思っていました。ですが、毎日、顔を出すうちに、小学生が顔を覚えてくれて、通りで会うと挨拶をしてくれるようになりました。それは思いもしない、私の喜びでした」

おばあちゃんはそう言うと、目の前の砂時計をひっくり返した。

あちこちから「ぷっ」と苦笑が漏れた。「そうだよな。おばあちゃんの話が3分で終わるわけがない。おばあちゃんは根っからの話好き。そして、人好きだもん。

僕が小学校に上がったとき、おばあちゃんのトイレ掃除は4年目に入っていた。いつも僕たち掃除当番より先に来ていて、僕たちが行くと、おばあちゃんはみんなに「こんにちは」と大きな声で挨拶をした。

最初、僕はおばあちゃんがいることが恥ずかしかった。いや、正確に言うと、トイレの掃除をしに来ていることが、恥ずかしかった。みんなが僕のおばあちゃんだと知って、からかったりした、でも、そのうち何も言わなくなって、それから、おばあちゃんのことを「颯太んちのお婆ちゃん」と好意的に呼ぶようになった。

おばあちゃんはトイレ掃除のエキスパートだった。トイレ用洗剤を振りかけ、専用のブラシと使い古した歯ブラシを使って、便器の見えないところの汚れまで掻きだした。そして、手縫いの雑巾で拭き上げる。手を洗う所も同じだ。床のモップ掛けや壁も拭いていた。それらはどれも手際がよかった。

壇上のおばあちゃんが砂時計をひっくり返した。何回目だろう。おばあちゃん放っておいたら、ずっと喋る。人の5倍くらいしゃべる。

あれは僕が小学校の低学年のときのときのことだ。課外授業で、近くのパン工場を見学に行った。行く途中、通りでお婆ちゃんが同じような年の女の人と話していた。僕たちが見学から帰るときも、おばあちゃんはまだそこにいて、しゃべっていた。そのとき、誰かが「颯太んちのお婆ちゃん、まだいたー」と言って、みんなが声を上げて笑った。僕はチョー恥ずかしかった。壇上のおばあちゃんを見上げて、僕はそんなことを思い出していた。

おばあちゃんがまた砂時計をひっくり返した。僕は呆れて、苦笑した。

「一、5年くらい経ったころでしょうか。3人の賛同者が現れました。みんな、年金生活者。元気で暇なお婆ちゃんたち。それからすごく楽になって、学校中のトイレが綺麗になるのも早くなりました。先生からいついつ学校にお客様が見える。なんて聞いた日には、いつも以上に念入りにやりました。それで、そのお客様が『トイレがきれいなのにびっくりしました』なんて言われたなんて、伝え聞くと、これまた頑張っとうろろうという気になりまして。が、これ、よく考えたら、先生方が私を喜ばせてやろうという、作戦だったのかもしれない」

壁を背にして、椅子に座っていた先生たちが、「違います、違います」と顔の前で手を振って、笑っていた。

「体が丈夫だったのか、それとも毎日学校のトイレ掃除に行く。という目的意識が私を丈夫にしてくれたのかはわかりません。それから、下の孫、こっちは男の子なんですがね」

おばあちゃんがそう言うと、「お前のことだよ」と後ろから背中を突つかれた。そんなの言われなくたって分かってるよ。と思ったが、「うん」と首を縦に振って、花を持たせてやった。

「その孫が中学へ進級したので、じゃあ、今度は中学校のトイレをやろうと。ただね、小学生よりずっと大きいので、そんなに汚すわけではない。と思っていたら、大間違い。まあ、酷かったですね。孫娘が「中学校のトイレは汚い」って言わなかったの？って、思われるでしょうが、これが中高一貫の学校に行っちゃったんですから、わからなかったんですよ。臭い。汚い。暗い、の3拍子。みごとに揃っていました。落書きも前衛芸術家的でした。その中で記憶に残っている一句があります。男子トイレの一室でした。『忘れるな ケツはしっかり拭いてくれ』」

おばあちゃんのこの一撃は、体育館中を爆笑の渦に巻き込んだ。みんな、腹を抱えて、笑いに笑った。

中学3年の夏の初め。おばあちゃんが背伸びをして、トイレの明り取りの窓ガラスを拭こうとしていたときだった。僕が手を貸そうとするより早く「おれ、やるから」と先に手を伸ばしてきた男がいた。素行の悪さで定評のあるSだった。Sはおばあちゃんのことを最初胡散臭い目で見えていたけど、それを機に、Sは少しずつ変わった。今、僕たちは親友で、ときどき家に遊びにくる。

「……、で、いつの間にか12年経って、私も今年、80歳になりました」

「エーッ」

女子が合唱した。

「見えない？」

おばあちゃんが聞いた。

「見えな〜い」

女子たちの2度目の合唱だ。

「78ぐらいに見える？」

すると、女子がハハハハハと明るく笑った。

「孫も今日卒業します。80になったので、私もトイレのお婆ちゃんから卒業しようと思います。でも、今、この街には小学校と中学校のトイレを綺麗にするメンバーが11人います。立ってもらっていいですか」

おばあちゃんが父兄席に向かって声を掛けた。僕たちはみんな後ろを向いた。1人のお爺さんを除いて、全員お婆さんだった。みんな照れくさそうだった。父兄席から大きな拍手が送られた。

「これからも学校の見学に来た人たちに、『みんなの笑顔と、トイレがきれいなのは驚いた』と言われるような学校であり続けてほしいと心から願っています。3分のつもりが長くなり、申し訳ありませんでした。ありがとうございました」

おばあちゃんはそういうと、砂時計を袖にしまった。いったい、何回、ひっくり返したのやら。

父兄席の拍手の間から、「神崎さん、ありがとう！という声が、一つ、二つと聞こえた。そして、ガタガタ、ガタガタとパイプ椅子の動く音がした。僕たち生徒は何事かと、後ろを振り返った。父兄席の人たちが全員立ち上がって、おばあちゃんに拍手を送っていた。

スタンディングオベーションだ！

「起立！」

生徒会長の柳田が前に出て、僕たちに向かって、号令をかけた。どこにもそんな筋書きはなかった。彼の独断だ。僕たちは言われるままに立ち上がった。柳田が回れ右をして、壇上のおばあちゃんに向かって「ありがとうございました！」と頭を下げた。僕たちは彼の後に続いて「ありがとうございました！」と頭をさげた。僕は心の中で「おばあちゃん、スゲー」と叫んだ。

「颯太君のお婆ちゃん、話が上手だったね」

卒業式が終わって、教室で優菜ちゃんに声を掛けられた。僕はそれだけで幸せな気持ちになった。

翌日、お姉ちゃんの高校の卒業式が終わり、その翌日、僕たちは家族5人で記念写真を撮りに行った。パパもママも正装だ。お姉ちゃんは大学の入学式用に買ってもらったスーツ。僕は4月から通う高校の制服。おばあちゃんは、もちろんたくさんの方の拍手を吸い込んだ、あの桜の着物だ。

そして、これが家族5人で撮る最後の写真だということを僕は知っている。パパとママは、僕とお姉ちゃんの入学式に出席したら離婚する。

お正月、ご馳走を食べ過ぎた僕は、夜中に腹痛をもよおし、トイレに駆け込んだのだが、そのとき、パパたちの寝室から、声が聞こえた。僕はドアに耳を当て、聞き耳を立てた。

パパが言った。

「離婚届。先に署名押印しておいたから。紗矢と颯太の入学式が終わったら、役所に提出するというので。親権は君に譲る。が、ひと月に1度か、2ヶ月に1度でもいい。面会はさせてほしい」

「……」

ママのすすり泣く声がして、それきりなんの話し声も聞こえなかった。

流行りのW不倫かどうかは知らない。そして、たぶん、2人がじっくりと考えたすえに出した結論だろうから、お姉ちゃんが泣きわめこうが、僕が懇願しようが、それが覆ることは、100パーセントないだろう。パパの「ここは決して譲れないとき」だと僕は思っている。

この1年、パパとママは家に帰ってくる日がいつも違った。お互いのスケジュールがうまく合わないとママはこぼしていたが、子どもはそんなイージーな嘘でごまかされはしない。

おばあちゃんは薄々感じていると思う。もしかしたら、ママから直接聞いているかもしれない。でもきつと何も言わない。おしゃべりは好きだけど、それぞれの生き方を誰よりも尊重する人だから。

エクステのまつ毛がああだ、こうだと騒いでいる能天気なお姉ちゃんは、たぶんこの状況を捉えていない。それだけに知ったときの反動が怖い。だが、そのとき、僕は家にいないから、八つ当たりされる心配は限りなくゼロに近い。そんな簡単な問題ではないけれど、深刻に考えると結構辛い。

僕の塾のお弁当と、お姉ちゃんの学校のお弁当作りから解放されたおばあちゃんは、何十年も封印してきた三味線の稽古を再開するという。おばあちゃんが人前で話すのがうまいのは、亡くなったおじいちゃんのおかげらしい、おじいちゃんは30年以上、市議員とかをやっていて、選挙のたびに、おばあちゃんと二人三脚で演説をしていたから、人前で話すことは得意なんだと、ママが教えてくれた。バリキャリの道を駆けていくママに代わって、おばあちゃんは僕とお姉ちゃんを育ててくれた。だから、おばあちゃんは僕のことをいっぱい知っているけど、僕はおばあちゃんのこと、知らないことのほうが多い。

僕が生まれる前に亡くなったおじいちゃんは剣道の有段者だった。家に賞状やトロフィーがいくつも残っている。僕はおじいちゃんの愛した剣道をずっと続けることで、おばあちゃんに喜んでほしいと思う。今の僕ができる精一杯のありがとうだ。

僕は短い春休みを友だちと映画に言ったり、ディズニーランドに言ったり、自転車で植物園に行ったりした。優菜ちゃんやSやSの彼女と一緒に。

そして、函館に旅立つ最後の夕方、優菜ちゃんと二人で海の見える遊歩道で、夕日を見ていた。その日は夕日を見るカップルがいっぱいいた。

「綺麗だね」

優菜ちゃんが言った。

「うん。……」

僕は頷いた。他の言葉が見つからない。優菜ちゃんが突然、僕の手に自分の指を絡ませてきた。僕の心臓が優菜ちゃんに聞こえるんじゃないかというくらい、バクバク音を立てる。

「颯太君の高校、男子ばかりでよかった」

優菜ちゃんの顔が僕の顔のすぐ横にあって、長い髪が僕の首筋に触れる。そして、優菜ちゃんの唇が僕の頬に触れる。僕が生唾をゴックンと飲み込んだら、

「日が沈む」

優菜ちゃんがそう言って、夕日に顔を向けた。そして、僕の手を、ギュッと握った。僕はこの急展開をどう受け止めていいかわからず、夢中でギュッと握り返した。

これは夕暮れ時の魔物だろうか。おばあちゃんとの思い出の浜は、この瞬間に僕の初恋の浜に変わった。